つくだ

学校だより　No.9
青森市立佃小学校
令和３年１１月２６日発行

全校児童数４６４名
男 子　２２３名
女 子　２４１名

◆教育目標◆
あかるく・かしこく・たくましく

「 多 様 性 」　～12月4～10日 人権週間によせて～

校長　　山田　彰利

地球上で最初の生物は、雌体(メス)しか存在せず、分裂によって、全く同じ個体を増やし続けた。しかし、性質が単一化し、環境の変化に対応できなくなった。種の存続のためには多様性が必要であり、分裂以外の方法で個体を増やすために、雄体(オス)ができた。

あるテレビ番組で聞いたことです。「…ああ、所詮、男は…」などと思ったものです。

もう一つ考えたのが、生命は「多様性」が前提になっているということ。

東京オリンピックのコンセプトにもなり、耳にする機会が多くなっている言葉ですが、学校現場でも、障害の有無にかかわらず共に学んでいこうとする「インクルーシブ教育」という教育の在り方が模索されています。実際に青森県では、特別支援学校のお子さんが居住地の学校に副次的に籍を置き、年に数回、居住地の小・中学校で交流をもつ、という試みが始まっています。

さて、日々の教室に目をやると、「今日のヒーロー」を帰りの会で発表し合う場を設けたり、道徳で友達のよさを見いだし発表し合う時間を設けたりしています。これらも、互いのよさ（らしさ）を認めていこう、自分とは違った他者を認める態度を育てていこうとする、学級レベルでの試みです。人はそれぞれに違って当たり前ということを学ぶ機会といってもよいでしょう。そこで思い出すのがこの詩です。

わたしと小鳥と鈴と　　金子みすゞ

わたしが両手をひろげても、　お空はちっとも飛べないが、
飛べる小鳥はわたしのように、　地面（じべた）をはやくは走れない。
わたしがからだをゆすっても、　きれいな音は出ないけど、
あの鳴る鈴はわたしのように、　たくさんなうたは知らないよ。
鈴と、小鳥と、それからわたし、　みんなちがって、みんないい。

３年生の教科書にも載っているこの詩の中の「わたし」は、多様性をあるがままに受け入れています。自分とちがう部分を「いい」と言い、最後に「みんなちがって、みんないい」と終わっています。他者のありのままを認め、受け入れながら過ごすことができれば、日々が発見と学びにあふれ、自分自身も常に成長していけるのではないでしょうか。

多様な他者を価値ある存在として尊重し、協働して様々な課題を解決していく力

これは、これからの社会において求められる最も大切な力の一つです。学校教育でも、もちろん佃小学校でも大切にしています。まずは、「ちがう」他者の尊重から…。